

NPO 法人 純正律音楽研究会会報 ～2022年8月発行～

# ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291  
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 2022年8月10日  
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会  
編集 相坂政夫

## No.73



8月に入り、ひときわ厳しい日差しが照りつけておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

先日、5月21日(土曜日)「純正律音楽コンサート」を横浜市磯子区民センター「杉田劇場」にて開催、今回は水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハープ)、荒井章乃(ヴァイオリン)の他に、豪華なゲスト、杉本伸陽(ビオラ)、植草ひろみ(チェロ)のお二人を迎え、大盛況のうちに終了いたしました。ご来場いただきました皆様、誠にありがとうございました。

次回のコンサートは、9月3日(土曜日)「癒しの音楽コンサート」山崎製パン総合クリエーションセンター飯島藤十郎社主記念「LLCホール」にて開催予定です。出演は、水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハープ)、吉原佐知子(箏)ゲストに、崎元譲(ハーモニカ)をお迎えし演奏いたします。ぜひご来場いただければ幸いです。

なお、今年最後のコンサートは、12月25日(日曜日)「クリスマスコンサート2022」横浜市磯子区民センター「杉田劇場」になります。

ご多忙中とは存じますが、ご来場いただければ幸いです。

今後とも純正律音楽研究会をよろしくお願い申し上げます。

## 初めてのハーモニカ

洗足学園音楽大学客員教授・ヴァイオリニスト  
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表  
水野佐知香

毎日の挨拶が「暑いですね!! 熱いですね」ですが、お元気でお過ごしでしょうか？

コロナ感染の人数も増え、大学の実技試験などは、5人のうち1人来れば良い日もあり、感染拡大していることを実感する毎日が続いています。

実は今、長野県の小海線の電車に乗っています。コロナ感染の心配で2年ぶり、小海で開催されるセミナーに向かっています。

昨日までの大雨はどこにいったのかしら？というように晴れて気持ちがいい天気です。木が多く久しぶりの自然の風景を堪能しています。電車は単線で上に電線ありません！ディーゼルカーです。電車に乗ると整理券を取って、降りるときに整理券と運賃を箱に入れるタイプのワンマンカーです。

木々のトンネルの中を走る電車！気持ちがいい♥感謝です！

これから4日間のセミナーが始まりますが、美味しい空気と星空を楽しみにリフレッシュしたいと思っています！

先日、純正律音楽研究会の理事会があり、事務所のある浜田山まで行ってきました。ハーブの三宅美子さんが中心になり、作曲家の矢澤弘章さんと一緒に玉木さんの遺産の楽譜を整理してくれています。生存中に一緒にクアルテットを演奏されてた杉本伸陽さんもこれからお力になってくださるそうです。ありがたいです。

さて、昨日は9月3日のコンサートの顔合わせがありました。ハーモニカの崎元譲さんとは初対面！有名な方ですが、今までご縁がなく初めてお目にかかせていただきました。本当に凄い方でした。ハーモニカの演奏は恥ずかしいのですが、聴いたことがなく、とにかくビックリ！心を揺さぶる音色と表現！どんなバランス？どんなふうにとそんな心配は吹き飛んで素晴らしい崎元さんのハーモニカに魅了されました。

海外で学び、世界コンクールで2位を受賞され、N響ではヴィラ・ロボスのハーモニカ協奏曲を定期演奏会で演奏されていますし、札幌交響楽団、東京交響楽団など日本中のオーケストラと共演されています。ヴァイオリンで弾くのも難しい、フランクのバイオリンソナタや現代作品も演奏され、日本の音楽家のために日本芸能実演家団体協議会の理事や実演家著作隣接権センター運営委員長など、身を粉にして動いてくださっている現状もお聞きし、とても頭が下がりました。とにかく凄い!! 9月3日のコンサートがとても楽しみです。どんなことが、どんな曲が演奏できるか、今からワクワクしています♥

今年は12月25日に杉田劇場でのコンサートが決まっています。

まだまだ暑い日が続きます、お身体を大切にお過ごしください♥

**ムッシュ黒木の純正律講座 第 72 時限目**  
**平均律普及の思想的背景について(61)**  
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

安倍元首相が銃撃され亡くなるという事件が起こってしまった。犯行の動機として統一教会との安倍元首相の関係が挙げられているという。515 事件や 226 事件は歴史として教科書の中の出来事であるという感じがしていたが、果たして同様の事件が自分の生きているうちに起こるとは驚きを禁じ得ない。

日本は自身を無神論者だと見做す人が多い国だと言える。かくいう私も無神論者だ。ここでは、無視論者ほど宗教につけ込まれやすい側面があるということを描きたい。

あなた方がどういう神を信じようがあなた方の勝手だが、私たちは特定の神に対する信仰は持っていないので、あなた方の信仰を尊重する代わりに私たちの生活には口を出してこないで欲しい。例えば、このような態度こそ、民主主義社会における宗教や文化の多様性のあり方だとは思っていないだろうか？ 実は、一神教の体系では、決してカルトだけではなく伝統宗教でさえも、このような考えはその根本において受け入れられていないということを確認しておきたい。

そもそもイスラーム教においてもキリスト教においても、神がないという発想は端からあり得ないのだ。彼らにとって神とはこの世界＝宇宙を創った存在であり、この世界があり、あなたも私もこの世界で生きている以上、誰かが我々とこの世界を創ったと考えているのである。故に、神の探求とは、この世界がどのような意図でどのように創られているかを探る試みでもあり、このような研究の成果が自然科学の発展に寄与したことは現在ではほぼ常識と言っても良いだろう。キリスト教は自然科学の弾圧者の側面もあるが、自然科学を育んだ土壌でもあるということだ。

創造主＝神の存在を前提とする以上、彼らにとって無神論者とは無知の輩に他ならない。自然科学の知見で武装した先進国の人間が、石や動物を神と崇めるいわゆる「野蛮人」を馬鹿にするように、一神教の信者は無神論者を世界の成り立ちといった神秘の探求を放棄した愚か者と考えるのだ。

だから、往々にして彼らとの議論は、互いの立場を尊重しあった対等の立場で行われるものではない。なぜなら、彼らからすれば、自分たち信者と無神論者の間の知的格差は明らかだからである。彼らは我々無神論者と話し合うのではなく、無知な無視論者を説得し、啓蒙し、導こうとしてくるのである。だから、正直、もしあなたが宗教や神に関心がないのなら彼らを前にしてできることは、話し合うことではなく、席を立って話し合いのテーブルから離れることなのだ。

このような状況を見て、政教分離の大切さを説く人もいる。政教分離の原則は重要だとしても、限界があることを理解しなければならない。そもそも政教分離と言っても、カトリックを基盤としたフランスのライシテとプロテスタントが多数派を占めるアメリカの信教の自由は大きく異なる。ライシテは公共空間に宗教を持ち込まない、という思想なのに対し、信教の自由は個人の信仰に口を挟まない、というものだ。例えば、ブッシュ大統領（当時）はイラク戦争の開戦時の演説で「アーメン」と神への言葉を口にしたが、もしフランス大統

領が演説でこの言葉を発したとすれば大問題となり辞任を求める声上がることは必須だ。信教の自由は大統領や政治家が自分の宗教への信仰を持つことを保証しているので、だからこそ演説で自らの信仰を持ち出すことが可能なのだ。対して、フランスでは公人が公の場に宗教を持ち出すことを一切禁止している。どちらにせよ、政教分離は決して神の存在を否定していない。

私の友人の芸術家は、プロテスタントの立場から信教の自由の原則を批判している。すなわち、信教の自由を認めてしまえば無神論も認めざるを得ず、そうすると統一教会のような危険なカルトに侵蝕の可能性を残してしまうからだという。私自身は無神論者ではあるが、この意見は傾聴の価値があると思っている。

最後に改めて確認しておきたい。一神教の信徒にとって、神がいないと言う選択肢は存在しない。神がいることを前提にした上で、その神の探求の仕方は色々あっても良いというのが、彼らにとっての信仰の多様性であり、そこには決して無神論は含まれていないということを確認しておきたい。

## 贋作三人衆他、その2

純正律音楽研究会 初代代表  
玉木宏樹遺作

さて、話を音楽に戻しましょう。恐らくベートーヴェン以降、社会の肥大と絶え間ない戦争によって社会構造は常に変化し、音楽でいえば、有名な作曲家の贋作を造っても、それで金儲けができるような時代はなくなりました。だから19世紀の間に贋作造りに精を出したような人物はいなかったはずですが、ところが世紀は変わり、20世紀に入るやいなや、昔とは全く違う意図で贋作を造った人たちが現れました。いろいろな人がいますが、まずは贋作三人衆として、次の3人を挙げましょう。フリッツ・クライスラー(1875~1962.オーストリア)、マリウス・カサドシュ(1892~1981.フランス)、トビア・ニコトラ(1934年に56歳)です。

クライスラーはウィーン出身の一世を風靡した超有名なヴァイオリニストであり、アメリカの自動車メーカーとは何の関係もありません。カサドシュはヴァイオリニスト、作曲家として有名でしたが、何といても勇名を馳せたのは、モーツァルトの贋作、ヴァイオリン協奏曲 No.7「アダライード」でしょう。一時はモーツァルトの真作とされ、ケッヘル番号もつけられて、メニューヒンが録音もしています。さて、3人目のトビア・ニコトラに関して、私は殆ど情報を持っていません。私はバッハ研究の権威、小林義武氏の著作「バッハ伝承の謎を追う」の中で初めてトビア・ニコトラの名を知りました。それから私がつたない調べを通して分かったことは、フェルメールの贋作者、ハン・ファン・メーヘレンの手法にとってもよく似ていることです。この件は後ほど詳しく見てみましょう。

さて、一番目はクライスラーです。クライスラーは1875年、ウイナー・ワルツの町、ウィーンに生まれ育った生粋のウィーンっ子です。音楽好きの医者家庭に育ち、7歳でウィーン高等音楽院に入るほどの神童ぶりで、ヘルメスベル

ガーにヴァイオリンを習い、作曲を何とあの辛気臭いおじさん、ブルックナー(クライスラーの51歳年上)に学んでいます。そのあと、パリ高等音楽院に移り、ドリーブにも学んでいます。ドリーブといえはあのバレエ「 Coppélia」で有名な作曲家ですが、クライスラーが特に面白いウラ話を描いています。この件は後ほど。

神童だったのですが、いろいろと回り道をし、ソリストとしてのデビューは24歳の時、ベルリン・フィルとの共演で、それ以後はすばらしい成功を収め、ロンドンでの成功の結果、エルガーがヴァイオリン協奏曲を献呈したほどでした。

クライスラーはしかし、もう一面でも有名になりました。それは演奏旅行中に訪問した各地の図書館や修道院の資料室で発見した数々の古い時代の作曲家たちの作品の発掘演奏でした。プニャーニ、フランクール、マルティーニ等々で私も子供の時、プニャーニ作曲、クライスラー編曲の「前奏曲とアレグロ」をさらったこともありましたが、今でもこの曲はよく演奏されるし、色んな演奏のCDも存在しています。しかし、1935年、クライスラー60歳の時、NYタイムスの記者とのやりとりの中で、発見したといった作品はすべて私の作曲だったと告白し、音楽界は上へ下への大騒ぎとなりました。なぜクライスラーは他人の作曲家の名前を騙ったのでしょうか。この顛末は次のようでした。

クライスラーがデビューした1900年頃は、有名なヴァイオリニストは自分用のソロ曲をたくさん作曲していました。クライスラーはブルックナー、ドリーブの弟子だったから、作曲はお手のものです。しかし自作のを人前で奏けるほどの評価はまだ受けていません。ですから自分の曲として発表したとしても生意気な！と無視されるのは眼に見えています。しかし、他人の曲は奏きたくない……そこでクライスラーはいたずら心からある一計を案じ、コンサートに臨みました。それは、今ではもちろんクライスラー作曲として有名な曲「愛の喜び」と「愛の悲しみ」の2曲を最近発掘したヨゼフ・ランナー作曲のワルツとして演奏し、もう一曲、「ウィーン綺想曲」をクライスラー本人の作曲として初演したのです。ランナーという作曲家は日本では知られていませんが、ヨハン・シュトラウス(父)と並んで、ウイナー・ワルツで一世を風靡したウィーン人では知らない人はいない有名な人物です。そしてその演奏の批評では、有名な評論家いわく、ランナーの未発表曲は、さすがシューベルトに匹敵するほどの名曲だが、クライスラーの野蛮で下品な、曲にもなっていないものを同時に演奏するとは何事だという、これぞ騙されているとも知らない評論家の史上最悪の批評です。クライスラーは憤慨して評論家に反論して手紙を書きましたが、それを読んだNYの記者がクライスラーを問いつめ、遂に贋作であることが分かったのです。

とにかく有名になってしまうと、後世の人の判断は甘くなってしまうので、この事件も、殆どがクライスラーの味方をしています。しかし私の見方は少し違います、金の為の人を騙したのではありませんが、クライスラーは人を騙すことに命をかけるほどの性悪だったんだと私は思います。それは、クライスラーの半ば自伝的な文章の中でドリーブとの大変面白いエピソードを書いているのですが、それを紹介しましょう。

クライスラーが作曲の修行でドリーブの助手をやっていたあるころ、それはドリーブが「Coppélia」のバレエ曲を作曲している時でした。実にモテモテで本人も女性好きだったドリーブ氏、仕事中にメッセンジャー・ボーイから手紙を

受け取りました。それはさる女性からのデートのお誘いで、それを読んだドリーブ氏、もう気もそぞろ、仕事を中断し、「クライスラー君、このワルツを書いておいてくれたまえ」と言ってデートに出かけました。そして帰ってきたドリーブ氏、クライスラーの書いたばかりのスコアを見て「うん、まあ、使ってみようか」と言って採用したのが、あの有名な「コッペリアのワルツ」だったというのです。私はこの話を全く信じこんで長い間、人前であの曲は実はクライスラーの曲だ、なんて知ったかぶりして言い回っていました。確かにあの曲は唯一とっていいほどのアウフタクトから始まるドリーブらしからぬ傑作だったからです。しかしある時、作曲家の生年月日や代表作の年代を調べていた時、トンでもないことに気づきました。なんと「コッペリア」は1867年の作曲で、初演は1870年、クライスラーが生まれる5年も前のことです。

ほんとにクライスラーってどういう人なんでしょうね！

CD レビュー 純正茶寮  
『Senhora da Lapa』 (1999)  
純正律音楽研究会理事 黒木朋興



『Senhora da Lapa』 (1999)

Maria Ana Bobone

レーベル : M.A. Recordings

ASIN : B00001T3JX

ポルトガルの民族歌謡、ファドの歌手である Maria Ana Bobone の歌声にピアノが伴奏している一枚。

ピアノということもあり純正律ものとは言えないが、不思議と自然な響きを奏でている。心地よい音の響きは決して調律だけに負っているわけではないということを示している。

この作品のレーベル、MA レーコーディングは、教会などの音響効果の高い空間で「2本の特殊な無指向性マイク1組」を用いてレコーディングするという

方針を貫いている。その結果、この作品は極めて自然で良質な響きを実現させている。これはピアノという楽器の特質と空間の音響効果が重なり合って到達し得た幸福な響きと言えるのではないだろうか？

実は、Maria Ana Bobone のチェンバロの伴奏による別のアルバムも持っていたのだが、こちらの方は響きが濁っているような気がして、やがて聴かなくなりどこかにやってしまった。おそらく平均律だったのではないだろうか？ 少なくとも、高い音響効果を誇る空間で混じり合うそのハモりはぎこちなく、お世辞にも純正律とは言い難いものであったと記憶している。今でこそ、古楽の演奏も発展を遂げ、古典音律での演奏は当たり前となっているが、20世紀末当時ではまた音律に関する研究も満足ではなかったのだろう。

ピアノとは、木だけで作られたチェンバロと違い、鉄のフレームが支えている。そこにピアノ線の振動が共鳴し独特の音響を醸し出す。ピアノの調律とは単なる調弦だけにとどまらずピアノという楽器全般のメンテナンスに関わるものであることを思い起こしておきたい。

ハモリ、といったものは、決して調弦だけに負っているわけではなく、楽器の構造や空間の音響効果など様々な要素が絡み合って成立するものであることを今一度指摘しておきたい。

## 神道をどう理解するか

NPO 法人 純正律音楽研究会  
正会員 弁護士 齋藤昌男

### 目次

- 第1. 緒論
- 第2. 神道の起源
- 第3. 日本の神々
- 第4. 祭り
- 第5. 神社の歴史
- 第6. 天皇家と神道（『古事記』及び『日本書紀』の位置付け）
- 第7. 仏教伝来と神仏習合
- 第8. 神道思想の流れ
  - 1. 神祇信仰
  - 2. 密教に取り込まれた神祇信仰
    - (1) 真言宗の神道論－両部神道
    - (2) 天台宗の神道論－山王神道
  - 3. 伊勢神道
  - 4. 儒家神道
  - 5. 吉田神道
- 第9. 明治の宗教改革と国家神道の確立
- 第10. 教派神道の成立
- 第11. 神社神道
- 第12. 民間神道（民俗神）



## 第13. 終戦後の宗教改革

### 第1. 緒論

日本人の民族宗教は、多方面にわたる信仰、習俗、実践の複合体であります。それが中国から入ってきた仏教、儒教と区別するために、神道と呼ばれる様になったと思われまゝ。その後1549年に入ってきたキリスト教を加えると、4つの宗教が日本列島で続いていることとなります。しかし、神道には定まった経典・教義がなく、日本人の生活の構成要素となっているため、明確にこれが神道であると定義付けるのは、大変難しく思われます。

まず筆者は試みに、神道古典と思われる『古事記』や『日本書紀』の要約を作ってみました。しかし、単なる書籍の紹介のようになってしまいました。次にその要約に「天照大御神」や「伊邪那岐命や伊邪那美命」などの代表的な神々を入れた『古事記・日本書紀』に登場する神々の紹介の様なものを作ってみました。しかし、とてもこれが神道であると言えるものではありませんでした。

そうこうする内に、河出書房新社発行、武光誠著『日本人なら知っておきたい神道』113ページが目にとまりました。津田左右吉（つだそうきち）（大正・昭和期の歴史学者）によると、神道と言う語には、下記の6つの用法があると言っているのです。すると、これら6つの用法を全部捉えたものが神道なのだと思います。

1. 古くから伝えられてきた日本の民族的風習としての宗教（呪術も含めている）
2. 神の権威、力、はたらき、しわざ、神としての地位、神であること、もしくは神そのもの
3. 民族的風習としての宗教に何らかの思想的解釈を加えたもの（両部神道、唯一神道、垂加神道など）
4. 特定の神社で宣伝されているもの（伊勢神道、山王神道など）
5. 日本に特殊な政治、もしくは道徳の規範としての意義に用いられるもの
6. 宗派神道（天理教、金光教など）

以上の6つの用法を全て捉えるには、神道の生い立ちから、現在までの歴史を全て捉える必要があると思われました。その上、400字詰原稿用紙50枚以内で纏めなければなりません。以下挑戦してみます。

### 第2. 神道の起源

諸説ある様ですが、筆者が納得するものを一つだけ紹介します。安蘇谷正彦著『神道とはなにか』（ぺりかん社発行）32ページにおいて神道の起源を説くに当って、まず「日本文化とは何か」から説いています。同書では、日本文化とは「一応日本人の生き方の様式あるいは日本人の考え方の傾向と規定して」おります。そして「日本文化の特色として、個よりも集団を重視する傾向（集団性）、および勤勉を尊ぶ傾向（勤勉性）の二つがあると考えている」としています。そして、水田稲作農耕を取り上げ、人間が手を加えれば加えるほど、稲は沢山穫れる。その意味で勤勉さが、日本人にとって重要な価値基準となったのではないかと論じています。そして、「とすれば、日本文化の形成を稲作農耕が日本列島において普及した弥生



時代とみなすことが妥当であろう。その意味では、神道の起源ないし形成期も、今から三千年前にはじまった弥生時代とみなすのがよいと推測される。」と論じています（同書35ページ）。そして同書では「縄文人は原日本人ではなく、原日本列島人だった」とする自然人類学者の池田次郎氏の説を引用しています。

### 第3. 日本の神々

#### 1. 神とは

広く宗教全般の信仰対象を総称して神といい、集合名詞としては神々あるいは神達、また神仏と複合して総称することもあり、一般に人知の及ばぬ神靈的な存在でその神秘的な働きをもって人に畏敬の念を抱かしめる対象をさして神と言っています。

#### 2. 類型

- (1) 自然神には自然物や自然現象を神格化した神々が属するもの、天体神、風神、雷神、地主神、山神、峠神、藪神、森神、柴神、石神、海神、河神、島神、湖沼の神、水神、火神があります。動物では、蛇、鱈、鮫、鹿、猿、狼、熊、猿、狐、兎、鳥、架空の竜などがあります。植物では、松、杉、檜、榊、桂などの古木や巨樹があります。
- (2) 文化神には、社会単位の神々としての屋敷神、村落神、血縁神、同族神、道祖神、境の神などがあります。
- (3) 人が神になる人間神

神々は『古事記』に登場するだけでも300柱以上あり、神として崇められており、偉人の御霊を含めると、さらに増えます。

#### 3. 天津神と国津神

日本の神々は、昔から数多く認められております。その数を総称して「八百万（やおろず）の神たち」とか「八十万（やそよろず）の群神」とか言われてきました。八百万とか八十万とかは、もちろん数を限定するものではありません。八は、古来「末広り」のめでたい数字とされ、両方とも神々が多いことをいう言葉です。この数多い神々を分類していいならわされてきたのが、天津神（あまつかみ）と国津神（くにつかみ）です。天津神とは高天原に存在する神や、高天原に生まれ、この国へ降りてきた神々のことです。他方、国津神は大別して、この国で生まれた神を指す場合と、天孫降臨以前にこの国に存在していた精霊や豪族を指す場合とがあります。

### 第4. 祭（まつり）

日本語におけるマツリは、マツル、マツラフという動詞に由来します。マツラフは、上位の者に奉仕するという意味の動詞であり、マツリはその名詞形です。このマツリという語のなかにあるマツは見えないものが顕在化したり、その顕在化の場で歓迎の儀を行ったり歓待したりすることを意味しています。

宗教用語として「ヒエロファニー」(hierophany)という言葉がありますが、聖なるものは何かを通じて顕現されますが、その何かを言います。聖体示現・聖化現象・神聖顕現と訳されています。日本の祭で言えば神霊を招いて迎え入れ、供献して神霊とともに侍座して神霊を楽しませ和ませようとする集団行事のことです。したがって、祭には、この時に人々の眼の前におられる聖なる神話的世界観とこれを共有する人々の集団という2つ

の重要な要素が本質的に係わっています。ここで俗なるものは、聖なるものから力をもらい聖なるものに感謝して、聖なる世界にかえっていただき、人は、聖なる力を獲得するのです。

大変面白い説明を見付けましたが、「フランス革命のように混沌の祝祭状況を創り出して祭の本質を具現化しているものもある」（日本民俗宗教辞典「祭り」の項目）というのがありました。

## 第5. 神社の歴史

1. 古代の人々は、巨石や大木、山、水など自然物の中に神が宿ると信じていました。最初は祭りに合わせて、自然物の近くに臨時の小屋を建てる程度でしたが、それが次第に常設となっていくたものです。
2. 奈良時代に入ると律令制度が確立し、神道は制度のなかに組み込まれて行きました。朝廷の祭祀と神社行政を司る官庁として神祇官が置かれ「祭」と「政」が別々に進められるようになりました。
3. 平安時代になると神仏習合が進み、神道よりも仏教が優位に立つことも多くありました。
4. 鎌倉時代に入り、実権を握ったのは武家です。源頼朝が政治を行う際に重視した項目の一つが神社の崇拝と神事で、それを御家人だけでなく庶民にまで浸透させました。
5. 室町時代には、社寺の事務が複雑になってきたという点から、神社のために社家（しゃげ）奉行が、寺のために寺事奉行が置かれるようになりました。伊勢講や熊野講が盛んになったのは、この時代です。
6. 安土桃山時代の織田信長、豊臣秀吉は、戦国の世で衰弱し、貧乏に苦しむ社寺を保護する一方で、政治に干渉してくる社寺を打ちのめしました。
7. 江戸時代に入ると、江戸幕府はキリシタン宗門禁圧の手段として寺請制度を設けました。一般庶民は必ず幕府が公認した仏教13宗のうちのいずれか1寺と師檀関係を結び、キリシタンでないことを証明するために、その檀那寺から寺請証文を受けました。この制度は神祇を奉祀してきた神職といえども免かれることは出来ませんでした。万一離檀すれば、戸籍の一種である宗門改帳から抹消され、無籍者となり、その土地に住めないばかりでなく、旅行・結婚・葬式を執り行うことが出来なくなります。そこで、寺院の羈絆を脱した新たな宗門、即ち神道宗門が神職によって起されました。このようにして寺宗13宗に加えて神道宗門が加わりました。そして明治に入り寺請制度が廃止され、これに代えて神社の氏子調べが定められると、仏葬を神葬に改め、全国民に及ぼそうとしました。

## 8. 神仏分離令

明治政府が発布した法令で、明治元年（1868年）3月17日「神祀事務局ヨリ諸社へ達」を初見とする一連の布達を総称していいいます。明治政府は江戸時代の仏教国教化政策を否定し、神道国教化政策をすすめました。神仏分離令は、江戸時代続いた寺請制度の否定であり、神社から仏教色をとりさって行く政策が着々と取られてゆきました。この波にのり、これまで僧侶の風下におかれていた神官たちは、この時とばかり明治政府の威をかりて、神仏分離にとどまらず、廃仏毀釈運動を展開してゆきました。廃仏毀釈については『ひびきジャーナルNo.58』（2018年11月発行）の「廃仏毀釈と教派神道の成立」で書きましたので、ここではこれ以上は

書きません。

## 第6. 天皇家と神道（『古事記』及び『日本書紀』の位置付け）

5世紀頃から、天皇は政治のトップであると同時に祭祀のトップとして神に豊作と国土の安寧を祈る神事を行っていたとされます。

そして8世紀に、天皇と神々の関係がまとめられたのが『古事記』及び『日本書紀』です。従って本来ならば、ここで『古事記』と『日本書紀』の概要を論ずべきですが、枚数を考えると、とても出来ません。

ここでは、『古事記』、『日本書紀』、天皇家及び神道との関係の基本的な考え方を以下に述べておきます。

『古事記』や『日本書紀』の内容が、即、神道でない事は言うまでもありませんが、天照大神の子孫が日本を統治するあり方を神道と規定した本居宣長は、『古事記』を通じて神道の内実を捉えようとした神道家であったと言えます。これに対して安蘇谷正彦氏は『神道とはなにか』（ペリかん社発行）119ページ終りから5行目以下で、以下の様に言っていますので引用しておきます。

「一方、『古事記』や『日本書紀』にみえる神代の物語は、わが国の正しい古伝承ではないという批判もある。その代表的学者としては津田左右吉が著名であり、大正二年（一九一三）に執筆された『神代史の新しい研究』の中で、『神代の物語は、皇室が日本統治するいわれを正当化するために作り出した物語』と主張し、神話というよりも六世紀半ば頃の政治思想の表明という見解を提起した。しかしながら、津田は記紀の伝承はすべて作為されたと主張している訳ではない。古代の信仰伝承の存在を容認しているし、第二次世界大戦後、左翼陣営の期待に反して、皇室の尊厳性を強調したことも周知の事実である。」

## 第7. 仏教伝来と神仏習合

1. 仏教の伝来は、私的には、帰化人が仏法を信奉していたと思われませんが、公的には538年百済の聖明王が使者を通じて仏像や経典を送ってきたことが日本への仏教伝来とされます。但し、538年かどうかは異説があります。念の為に、異説とされるものを引用しておきますと、日本書紀巻19欽明天皇の即位13年（552年）の冬10月のところに、百済側からの発信としての記述がありますので、仏教伝来は552年とする異説の根拠です。
2. 神仏習合とは、わが国の神祇信仰と仏教が接触、混融して独特の行法・儀礼・教義を生み出した宗教現象をいいます。明治維新による神仏分離・廃仏毀釈以前、日本は1000年以上にわたる神仏習合の時代でありました。
3. 神仏習合の事象がはじまったのは、7世紀の末期から8世紀初頭にかけてと言われています。一般には神仏習合現象の先駆けとみられるものとして、次の3つが有名であります。
  - (1) 山林仏教徒の神祇崇拝  
山で修行する僧が山の神を祭ることや、日本の神のために僧侶が読経することを言います。
  - (2) 神宮寺の建立  
神社の境域内に建てられる寺をいいます。

### (3) 護法善神

仏法を守る善なる神のことをいいます。

4. 神仏習合を説明する根拠として本地垂迹説があります。本地垂迹説とは、神は仏が日本の衆生を救済するために仮に姿をかえて現れたものとする説です。神は仏の垂迹（衆生を救済するためにこの世に生まれること）、仏は神の本地（本来のあり方、本体）であり、両者は究極的に同体不可分の関係として捉えられました。

## 第8. 神道思想の流れ

### 1. 神祇信仰

神祇の「神」は天の神、「祇」は地の神を指しており、天の神は天津神、地の神は国津神を表わし、これら天津神と国津神を信仰することを総じて神祇信仰といいます。ただ神道で神として信仰される対象は、自然物であったり、先祖であったり、村の鎮守の神であったり、幅広い対象です。もともと神祇信仰は、一族とか、村といった共同体で信仰するものでありました。ところが仏教の広がりとともに、神祇信仰の対象も個人個人の信仰へと変ってゆきました。

### 2. 密教に取り込まれた神祇信仰

古来より神祇信仰は祭祀儀礼などを慣例化して行ってきたために、経典もなければ、体系的な教義もありませんでした。中世神道は体系化された経典に代わる理論的教義を整えることで成立してくる訳です。中世神道成立以前の教義体系のあいまいな神道、即ち、儒教・仏教など外来宗教の影響がまだ顕著でない8世紀前期ごろまでの神道のことを「古神道」とか「原始神道」といいます。

2度の蒙古襲来と神国思想と相俟って、神祇思想に対する期待が増していったなかで、真言系と天台系の密教によって神祇信仰が体系化されていた訳です。

#### (1) 真言宗の神道論—両部神道

伊勢神宮内宮に胎藏界曼荼羅、外宮に金剛界曼荼羅の2つがあり、ともに大日如来を中央に配置し、この2つの曼荼羅を両部と呼び、これら両部に神祇信仰の神々を配置することで密教的な神道解釈をするのが両部神道であります。mandala（梵語）とは仏の悟の境地を意味、それを図絵にしたものを、中国・日本では専ら曼荼羅といいます。

#### (2) 天台宗の神道論—山王神道

山王神道は延暦寺の鎮守社である日吉大社の山王信仰を基盤として天台宗で形成された神道の一流派です。

### 3. 伊勢神道

神仏習合神道説つまり本地垂迹説に対して、天照大御神が仮の姿となって現れたのが大日如来であるとする「神本仏迹説」であります。伊勢神宮の神職で度会（わたらい）氏がとなえたもので「度会神道」とも言います。

### 4. 儒家神道

江戸時代に入ると、幕府の教学が「儒学」と定められたため、「儒神一致」の傾向が顕著に見られるようになりました。江戸時代の儒学には「朱子学派」「陽明学派」「古学派」「山崎派」などがありますが、いずれも「儒神一致」を標榜しており、これらを総称して「儒家神道」といいます。

## 5. 吉田神道

室町時代の後期に吉田兼俱によって完成され、朝廷の後ろ盾もあって神祇神道界に多大な影響力がありました。吉田家はもともと室町という姓を名乗っていましたが、足利義満が京都の室町第に移ると、当時の当主であった室町兼熙（かねひろ）は家名を吉田にあらため吉田兼熙と称するようになりました。そして「神道の元老」として公卿の列に加えられました。

吉田兼熙の曾孫が吉田兼俱で、神祇信仰の教義儀礼を体系化しました。吉田兼俱は、『日本書紀』では、最近に現われる神を国常立尊（クニノトコタチノミコト）としているので、これを大元尊神と理解して、宇宙の本体と説きました。大元尊神は宇宙の本体であるから、万物に大元尊神が宿っており、神道こそが全ての教えの根本であり、仏教や儒教は神道から生まれたものであるといます。従って、すべての仏も菩薩も宇宙の本体である垂迹にすぎないのであって、本地は神であると説きます。即ち、これは「反本地垂迹説」ということになります。

## 6. 復古神道

江戸の半ばを過ぎて、神道はようやく本来の姿にたどりつきました。これが「国学」であり「復古神道」であります。それまで世に流布していた神道論は、外来の仏教・儒教・道教と結合していました。「復古神道」は荷田春満（かたのあずまろ）、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らにより説かれました。とりわけ真淵の神道を受けついで宣長は、その神道説の大成者となり、現在の神道は基本的には「宣長神道」であります。

## 第9. 明治の宗教改革と国家神道の確定

1. 明治の宗教改革は、4種類の神道の区分を生じさせました。それは皇室、すなわち天皇家の神道、地域で実践される神社神道、教派神道、民間神道の4種です。

### 2. 国家神道の確立

1869年4月25日、明治天皇は、神官の長としての役割を負って、日本の指導者たちの前に姿を現しました。彼は神道の儀式を主導し、その後で新たに発せられた5箇条の御誓文を読みあげて、それを公式に国家の法としました。彼の行動は、神道崇拝と政治の結合という古代の原則を復活させました。こうして神道は正式に国家の宗教となりました。新たな御誓文のもとで天皇は生きた神として国民の崇敬を受けることになりました。

神職は神道を管轄する官庁である神祇官（後に神祇省、教部省、内務省社寺局）に属する官吏となりました。

## 第10. 教派神道の成立

神道が国家の宗教となったことで、仏教がその影響力を失い、多くの人々は、宗教的な支えを失ったように感じておりました。相当な人々が庶民の中から起っていた宗教運動に救いを求めました。これらの「新興宗教」の中には、明治以前の時代にその起源をたどれるものもあつたし、明治時代あるいはそれ以後に姿を現したものもありました。これらは文字通りに新しいものではありませんでしたが、古くからの伝統的な仏教や神道に比べると新しいものでした。神道として識別するには曖昧で疑わしいものもありましたが、13の新しい教派が、明治政府によって教派神道として分類され、国によって強制された神道とは別のものであり、その宗教活動の存続が認められまし

た（13派のうち12派は1867年から1908年の間に設立されました）。13の教派神道は以下の通りです。

(1) 神道大教（しんとうたいきょう）

昭和15年（1940年）以前は神道本局という教派名でありました。本部は東京都港区西麻布。明治8年（1875年）に設置された神道事務局と深い関係を持っています。明治15年（1882年）、神道は祭教分離、続く17年には教学分離となり、神道各教会を統括していた神道事務局は改組され、19年に名称を「神道」、「本局」を教団名とする教派神道の一派となり、各教会の統括も神道（本局）に引き継がれ、多様な系列の教会が管轄下に置かれました。しかし、金光教、天理教など有力な教会が一派独立するに従い、次第に教勢は弱まりました。公称信者数約4万人とされています。

(2) 黒住教（くろすみきょう）

黒住宗忠により、1814年創立。本部は岡山市尾上の「吉備の中山」神道山、公称信者数28万人。

(3) 神道修成派（しんとうしゅうせいはい）

新田邦光（くにてる）により、1873年創立。本部は東京都杉並区松庵3丁目。公称信者数3万5千人。

(4) 出雲大社教（いずもおおやしろうきょう）

千家尊福（せんけたかとみ）により、1873年創立。本部島根県出雲市大社町杵築東宮内86、公称信者数125万人。

(5) 扶桑教（ふそうきょう）

宍野半（しんのなかば）により、1875年創立。富士信仰の流れを汲んでいます。本部は東京都世田谷区松原1丁目、公称信者数4万5千人、当教から脱退した教派に丸山教があります。

(6) 実行教（じっこうきょう）

柴田花守（しばたはなもり）により創立、1882年独立。近世の富士信仰の一つである不二道を基盤としています。戦前は東京新宿に本庁を置いて活動していました。本部は埼玉県大宮市盆栽町。公称信者11万人余。

(7) 神道大成教（しんとうたいせいきょう）

平山省齋（せいさい）により創立、1882年独立。本部は東京都渋谷区神宮前6-5-3。公称信者数5万1千人。

(8) 神習教（しんしゅうきょう）

芳村正乗（よしむらまさもち）により、1880年創立。彼は御嶽山、富士山、鞍馬山などで新しい山岳修行を重ね、実践的な神道家として独自の道を歩みました。本部は東京都世田谷区新町。公称信者数28万人。

(9) 御嶽教（おんたけきょう）

下山応助（おうすけ）により創立、1882年一派は独立。基本的には御嶽山信仰を中心とする近世の講社的教団の発展的形態であります。本部奈良県奈良市大淵3775。公称信者58万人。

(10) 神理教（しんりきょう）

佐野経彦（つねひこ）により創立、1894年一派として独立。日本古来の神道を体系化するという意図が中心にあります。本部福岡県北九

州市小倉南区徳力。公称信者数30万人。

(11) 禊教(みそぎきょう)

1843年6月に三宅島に配流となり1849年に死去した井上正鉄(まさかね)の思想や教えをもとに弟子により、1875年創立。本部山梨県北巨摩郡小淵沢町高天原(古神道本宮身曾岐神社があります)、公称信者9万人。

(12) 金光教(こんこうきょう)

川手文治郎〔赤沢文治〕により、1859年創立。金光教の活動の特徴づけるものに「取次」というのがあります。「取次」とは、人の願いを神に、神の思いを人に伝える、神と人とを取次させる行為です。本部岡山県浅口郡金光町大字大谷320。公称信者数44万人。

(13) 天理教

中山みきにより1838年に創立。1908年独立。1970年、[教派神道連合会を脱会]し、神道と分かれしました。《ほんみち》は天理教の分派であります。本部天理市三島町271。公称信者数約188万人。

## 第11. 神社神道

神社を中心に営まれる日本固有の宗教のことで、神道の基本領域を形成しています。ただし、神社神道という呼び方は、明治以後、教派神道と区別するために用いられる様になったものです。主な神社神道は以下の通りです。

(括弧内の数字は、宗教法人神社本庁が平成2年(1990年)から同7年にかけて調査を実施した「全国神社祭祀祭礼総合調査」の結果を記したものです。

(1) 八幡信仰の神社(7, 817社)

豊前国宇佐の八幡宮(宇佐神宮)に始った信仰で、土地の神祇信仰に外来宗教の影響で、神道・仏教・道教などが融合して成立した信仰です。祭神の「八幡さま」とは、第15代・応神天皇のことで、「応神」は死後に贈られた「諡号(しごう)」で八幡社の祭神としてはホンダワケの名を用います。

(2) 伊勢信仰の神社(神明〈しんめい〉信仰)(4, 425社)

伊勢神宮は、正式名称は「神宮」のみです。アマテラスオオミカミを祀る内宮とトヨウケノオオミカミを祀る外宮を中心に、14の別宮その他125社からなっています。神体は八咫鏡で、皇室の祖神で同時に国家鎮護の最高神とされています。

(3) 天神信仰の神社(3, 953社)

菅原道真(845~903)を天神として祀る信仰で、菅原道真と天神への崇敬は、平安時代中期から今日に至るまで、各時代の歴史思想を背景として、日本の文化・思想・宗教・社会のうえで、幅広く普及し影響も大きいと言えます。人を神霊として祀る神社が現われるようになったのは、平安時代中頃だと言われ、800年(延暦19)、第50代桓武天皇により創建された奈良の御霊神社からとされています。

(4) 稲荷信仰の神社(2, 970社)

京都市伏見稲荷大社に主祭神の一柱として祀られているのがウカノミタマ(宇迦之御魂神)です。名前の「ウカ」は穀物・食物を意味します。ではなぜ「お稲荷さん」と呼ばれるようになったのでしょうか。実は「お



稲荷さん」は、もともと渡来系の氏族・秦氏が氏神として祀った農耕神であったと伝わっております。その農耕神は稲を象徴とする神で、「稲生る(いなる)」がイナリとなったと言います。

では何故お稲荷さんと言えば狐なのか。狐はお稲荷さんの使いで、中世まで遡る根強い民間信仰(眷属〈ケンゾク〉信仰)で、ウカノミタマの別名ミケツと狐の古名ケツとの音通から「三狐神(ミケツカミ)」の字を当てたことによると言います。

#### (5) 熊野信仰の神社(2, 693社)

熊野本宮大社(本宮)、熊野速玉大社(新宮)、熊野那智大社(那智)の、総じて熊野三所もしくは三山に対する信仰をいい、熊野は、他社に比肩を許さないいわゆる「日本第一大霊験」などと言われております。熊野三山では、それぞれ主祭神が異なります。

鎌倉・室町時代には武家や庶民の間にも熊野信仰が広まり、多くの人々が聖地を訪れる様子が「蟻の熊野詣」といわれました。

#### (6) 諏訪信仰の神社(2, 616社)

諏訪神社は、竜蛇信仰、風神信仰、祖先信仰からなると伝えられています。諏訪神社の中心は諏訪湖を挟んで鎮座する諏訪大社であります。諏訪大社はタケミナカタノカミ(建御名方神)とヤサカトナノカミ(八坂刀売神)を祀り、本宮と前宮からなる上社と、春宮と秋宮からなる下社とからなります。大国主神の御子神タケミナカタノカミは、タケミカズチノカミ(建御雷神)に敗れて諏訪の地に逃れたと『古事記』に書かれています。現在も諏訪大社には本殿がなく、上社は山を、下社は神木を御神体としています。

古くは鹿の頭を備えたという御頭祭、御射山御狩神事、また氷結した諏訪湖の亀裂によって吉凶を占う御神渡(おみわたり)など独特の神事は見られます。とくに寅(とら)・申(さる)の年の5月に行われ、山中より長さ16メートル余りの柱を曳いて四宮とも境内の四隅に巨大な自然木(樅)が立てられております。

#### (7) 祇園信仰の神社(2, 299社)

祇園とは梵語のJetavanaの訳で、勝林と意識し、また祇樹給孤独園(ぎじゅきつこどくえん)と称し、それを略して祇園といいます。もとジェータ(祇陀)太子所有の苑林でありましたが、スダッタ(須達)長者がこれを買って受け、釈尊に奉ってこの地に精舎を建てました。このため祇園精舎といいます。

明治の神仏分離の折に、京都の祇園社が八坂神社と改称し、各地の祇園社もこれになりました。現在全国に2200社を超える八坂神社があります。

#### (8) 白山信仰の神社(1, 893社)

加賀・越前・美濃・飛騨4ヶ国にまたがって聳える白山を対象とする山岳信仰のことをいいます。白山とは御前峰・大汝峰・別山の総合名称で、ここを水源とする加賀の手取川、越前の九頭竜川、美濃の長良川の三大河の流域に生まれた信仰は仏教や道教の影響下に山岳信仰として平安時代の初期までにそれぞれの大河の信仰の拠点として加賀馬場・越前馬場・美濃の馬場を形成しました。

石川県石川郡鶴来町三宮町に鎮座する白山比咩神社（しらやまひめじんじゃ）は、白山（はくさん）神社・白山（はくさん）権現などとも言われ、白山頂上の奥宮に対して白山本宮と称し、下白山（しもしらやま）とよばれ全国にある白山神社の総本社であります。

(9) 日吉信仰の神社（1, 724社）

山王社（さんのうしゃ）、日吉神社（ひよしじんじゃ）、日枝神社（ひえじんじゃ）は滋賀県大津市坂本5-1-1の日吉大社に源を発しています。もともと天台宗の寺院の鎮守として勧請され、明治以後独立したところも多く含まれています。

江戸の日枝神社（千代田区永田町2-10-5）については、武蔵野を開いた江戸氏が山王宮を祀ったのが起源で、徳川家康が江戸城を居城とした際に城内に置かれました。2代目将軍・秀忠によって城外に遷移され庶民からも親しまれる様になりました。しかし、明暦の大火で被災し、4代目将軍家綱が現在地に再建しました。日本三大祭り・江戸三大祭りの一つが「山王祭」祭りです。

(10) 山神信仰の神社（1, 571社）

農民の間では、春秋に田の神・山の神が交替するという信仰が広くみられ、山の神は春には山から里に降りて田の神となり、稲田の成育を守り、秋には再び山に戻って山の神になるといいます。

猟師、炭焼、木樵などの山の仕事に従事する人々が信仰する山の神は、一般には山を守護する神でありましようが、農民の山の神のように、田の神・山の神の去来という観念はありません。

以上の他にいわゆる山岳信仰というのがあります。山を神が宿ったり、降臨したりする場所、あるいは祖霊の存する場所などとして神聖視し、崇拝したり祭祀の対象としたりすることを言います。

- ① 石鎚信仰（石鎚山は四国一の高山）
- ② 大山信仰（神奈川県丹沢山塊の東端）
- ③ 御嶽信仰（火山事故のあった御嶽山）
- ④ 大山信仰（鳥取県の西部に位置し、伯耆富士（ほうきふじ）とも呼ばれ、弥山、天狗ヶ峰、三銀峰などからなります）
- ⑤ 立山信仰（前述の白山と並ぶ北陸地方の代表的修験道と山岳信仰の山であります）
- ⑥ 出羽三山信仰（羽黒山、月山、湯殿山の総称、出羽三山といえます）
- ⑦ 日光山信仰（男体山、女峰山、太郎山の三山）
- ⑧ 英彦信仰（ひこさんしんこう）  
（福岡県の南部大分県寄り、南獄・中獄・山獄の三獄）

(11) 春日信仰の神社（1, 072社）

春日大社は藤原氏の氏神である鹿島（かしま）・香取（かとり）・枚岡（ひらおか）の祭神を春日御蓋山の麓に勧請した神社であります。藤原氏の氏神信仰が春日信仰の中心でありましたが、後生にさまざまな性格が付与されました。平安時代の後期には興福寺が別当寺としての地位を確立したため、興福寺・法相宗の守護神としての性格が強まりました。

(12) 愛宕信仰の神社（872社）

京都では玉城鎮護のためにその西北の山上にまつられたものと考えられ

ております。中世、仏教との習合によって多くの修験者がこの山に住んだところから、その祭神は愛宕権現太郎坊と呼ばれ、天狗と考えられるようになり、輩下に多数の部類眷属を率いるものとして大いに畏怖されました。

他方その本地仏は勝軍地蔵と名づけられて、必ず軍地の勝利を得るといわれました。特に徳川家康は関ヶ原の戦いに勝軍法を修して勝ったことから、慶長8年（1603年）に芝桜田山の丘陵に愛宕権現を勧請して社殿を営みました。

#### (13) 三島大山祇信仰の神社（704社）

大山祇神社（おおやまずみじんじゃ）は、愛媛県越智郡大三島町大字宮浦に鎮座し、瀬戸内海大三島にあるため、大三島神社とも言います。はじめ津の国御志摩（摂津国三島）に鎮座し伊予国三島に移ったので三島大神・和多志大神（わたしのおおかみ）とも称します。三島水軍の河野氏の崇敬を受け、また北条氏、足利氏ら広く武家の信仰を集め、奉納された甲冑、刀剣類の宝物は日本有数の質・量を誇っています。現在は海上守護、農業の神様また全国の鉱山の神として信仰を集めています。

#### (14) 鹿島信仰の神社（604社）

鹿島信仰は茨城県鹿島町に鎮座する鹿島神宮を根本としています。その信仰は水に関する信仰、サエの神（道祖神）としての信仰、鹿島神宮への信仰に大別出来ます。東日本各地に鹿島送り・鹿島流し・鹿島人形・鹿島踊り習俗を流布させています。

#### (15) 金毘羅信仰の神社（601社）

香川県仲多度郡琴平町に鎮座する金毘羅神社には、航海、漁業の守護神のほかに雷神・水神、農耕神、留守神としての信仰もあります。その鎮座の地勢に重要な意味があり、瀬戸内海における東西よりの潮流の離合集散が塩飽諸島を中心としていることであります。潮流離合の中央近くに兀立する象頭山を日和山として、山にかかる雲形は天候予知の上で注目してきたものであって、象頭山の一角に雲気神社が建立されています。

#### (16) 住吉信仰の神社（591社）

「住吉さん」と呼ばれ親しまれている住吉三神は、ソコツツノオ、ナカツツノオ、ウワツツノオの三柱の総称です。航海の安全を守り、大漁や商売繁盛を約束する神として古くから信仰されてきました。『古事記』によると、イザナギが黄泉の国から戻ったとき、穢を清める禊を行ったときに、水底ですすぐとソコツクノオ、中ほどですすぐとナカツツノオ、上のほうですすぐとウワツツノオが生まれたといえます。

大阪市住吉区にある住吉大社の4棟の本殿は、最古の神社建築様式の一つで全て国宝です。神社本庁の統計では、上記の通りですが、摂社・末社が多く、その数約2,000社とされています。

#### (17) 大歳信仰の神社（548社）

大年神・大歳神（おおとしのかみ）は年神様として親しまれ、正月にお迎えする神で、門松も鏡餅も大年神にむけたおもてなしです。全国各地に、この神を祀る神社が見られます。

『古事記』においての大年神（おおとしのかみ）は、スサノオノミコト（須佐之男命）とカムオオイヒメ（神大市比売）の子神です。大年神は年の変わり目に訪れて、家の安泰や繁栄を見守ってくれる豊穰の神です。民

俗学者柳田国男は、「一年を守護する神、農作を守護する田の神、家を守護する祖霊の3つを一つの神として信仰した民間神が年神である」と紹介しています。

(18) 巖島信仰の神社 (530社)

日本三大弁天と言われる竹生島神社 (滋賀県)、江島神社 (神奈川県)、巖島神社 (広島県) も水に囲まれた島に鎮座しています。これらの神社で祀られているのが、古代日本の代表的な海の神・宗像 (むなかた) 三女神であります (竹生島神社は宗像三女神のうちイチキシマヒメのみを祭神とします)。宗像三女神は海上交通を守護するとして信仰され、宗像大社 (玄界灘のほとり中央の沖ノ島にある沖津宮、陸地近くの大島にある中津宮、内陸の宗像市にある辺津宮よりなります) 及び巖島神社 (広島県廿日市市宮島町) を大総本山とします。

(19) 貴船信仰の神社 (463社)

貴船 (きふね) 神社は、京都市左京区鞍馬貴船町に鎮座しており、貴船川の川上にあります。この神は山谷の雨水を掌る神として、古く雨乞・止雨の神とされてきました。今日でもここは京都市を北に距てる16キロの山谷の地で、境内に老杉古檜が繁栄し、幽深の別天地であります。全国には当社の分祀が多数あり、祈雨・止雨の信仰を弘めています。

(20) 香取信仰の神社 (420社)

香取神宮は、千葉県佐原市香取に鎮座しています。下総国の一宮で、祭神はフツヌシノカミ (経津主神) で、古代の地形では東国の東端で、大河の河口に近く、湖と入江が多く、しかも大洋に臨む地にあつて、鹿島とならんで大和朝廷が早くから深い関係を持った神社であります。

(21) えびす信仰の神社

福の神として絶大な人気を誇る「恵比寿 (えびす) さん」は七福神の一柱で右手に釣り竿を持ち、左脇に鯛を抱えた姿で有名であります。しかし、その起源はいささか複雑であり、3系列あります。

ヒルコ系の恵比寿信仰の総本山とされる兵庫県の西宮神社は、ヒルコを主祭神としてアマテラス、オオクニヌシ、スサノオを祀っています。ヒルコとは、イザナギとイザナミが最初に生んだ子で神とされています。

島根県の美保神社はコトシロヌシ系恵比寿信仰の総本社です。コトシロヌシは国譲り神話で父オオクニヌシに国土の支配権をアマテラスに譲渡するよう進言した託宣の神です。

恵比寿信仰と結びつけられているもう一柱の神さまは、スクナビコナです。『古事記』では親神カミムスヒ、また『日本書紀』ではタカミムスヒの指の間からこぼれ落ちた小さな神で、一寸法師やかぐや姫など「小 (ちい) さ子」の伝承の原型とされています。

(22) 浅間信仰の神社 (397社)

富士山に対する信仰をいいます。富士山が浅間と称される理由については、「あさ」「あそ」の語が火山や噴火などの意味をもつことに求める説などがありますが、定説はありません。なお、長野県の浅間山、三重県の朝熊 (あさま) 山に対するアサマ信仰もあります。なお「あさま」は古称で、最近では「せんげん」と言います。

(23) 秋葉信仰の神社 (362社)

静岡県周智（すち）郡春野町領家の標高866メートルの秋葉山頂に鎮座する秋葉山本宮秋葉神社より発祥した信仰のことをいいます。火防鎮護の信仰で知られています。江戸時代貞享2年（1685年）に神社の眷属神である秋葉三尺坊の神輿が東海道沿いに京都と江戸に向って渡御したため、治安を乱すとして幕府が禁令を発しましたが、この事件が世間の噂を呼んで全国的に流行しました。

#### (24) 荒神（こうじん）信仰の神社（317社）

荒神の信仰は多岐にわたっていますが、

(i) 屋内の火所にまつられ、火の神・火伏せの神としての性格を持つ、三宝荒神の信仰、(ii) 屋外に祀られ、屋敷神・同族神・部落神といった内容をもつ、地荒神の信仰、(iii) 牛馬の守護神としての荒神の信仰、の3つに大別出来ます。

#### (25) 賀茂信仰の神社（277社）

(i) 京都の賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじゃ）、通称上賀茂神社の祭神として祀られているのはカモウケイカツチ（賀茂別雷大神）で本性は雷神であり、農業に関する雨と治水を司る神様です。厄除け、雷除けの神様としても広く信仰されています。

(ii) 賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ）、通称下賀茂神社の祭神として祀られているのはタマヨリヒメノミコト（玉依媛命）とカモタケツヌミノミコト（賀茂建角身命）で、ご利益は、国家安泰、五穀豊穰、無病息災などです。東殿にタマヨリヒメが、西殿には賀茂建角身命が祀られており、末社である相生社は縁結び、河合神社には美人祈願のご利益があるとされています。

#### (26) 水神信仰の神社（277社）

水辺に水の神の存在を認める信仰は多く、旧暦12月1日は川に餅を投げ込むなど水神へ供物する行事が各地にみられ、水神の荒ぶる日に水の災厄を避けようとしてきました。一方、危害を加えるのとは逆に農耕生活に水を供給し豊穰をもたらす神として、八月十五夜前後になると水神の祠を飾り、太鼓踊りを奉納するなどして歓待をします。これが5月に行われる場合には田植えのために水を必要とし、さらに洪水を防ぐことを目的としています。

### 第12. 民間神道

前記の第3. 日本の神々の2. 類型(1)で自然神を、また類型(1)の2で文化神を列挙しています。これらについて論ずると膨大なものとなるので、ここでは省略致します。

### 第13. 終戦後の宗教改革

#### 1. 神社本庁

神社本庁は、本宗に伊勢神宮を仰ぎ、各神社の包括（包括法人）を目的としており、その加盟数は、2017年10月現在で、7万9000社以上あります。全国には約8万の神社があるので、殆んどが属していることになります。何故にこの様になったのでしょうか。

戦前は、神社は国の祭祀を担う所として政府から支援を受ける半公的な施設でありました。しかし、終戦により昭和21年（1946年）神祀院が廃止され、国家管理を離れました。この為国の支援がなくなり経済的基盤を失い運営ノウ・ハウも持ちませんでした。全国の神社は宗教法人として生き残

りを図り、神社統括を目指して「皇典講究所」「大日本神祇会」「神宮鶉奉齋会」の3団体が組織されました。そして、1946年2月、これらの3団体が統合して設立されたのが、神社本庁です。もっとも少数ながら神社本庁に加入していない「単立神社」もあります。日光東照宮、伏見稻荷大社、靖国神社などです。

## 2. 宗教法人法の制定

宗教法人法は、戦前の宗教団体法（昭和14年）、戦後まもなくの宗教法人令（昭和20年）を経て昭和26年4月3日に制定されました。宗教団体が、礼拝施設をはじめとした財産を所有、維持運営し、その目的達成のための業務および事業を運営するために、宗教団体に法人格を与えることを目的として制定されました。

3. ここで次の様なエピソードが『日本人として知っておきたい神道と神社の秘密』（彩図社発行）26ページ以下に載っていますので紹介します。太平洋戦争終戦後、昭和天皇は「現人神」でないことは認めたが、「天照大神の子孫」であることを否定した文言だけは、断固として拒否したそうです。

(参考文献)

1. 吉川弘文館発行『神道史大辞典』
2. 弘文堂発行『神道事典』
3. 東京堂出版発行『日本民俗宗教辞典』
4. ペリかん社発行、安蘇谷正彦著『神道とは何か』
5. 吉川弘文館発行、岡田荘司編『日本神道史』
6. 朱鷺書房発行、真弓常忠著『神道祭祀』
7. 彩図社発行、神道と神社の歴史研究会編『神道と神社の秘密』
8. 学習研究社発行、岡田稔、茂木栄編『日本の神々の事典』
9. 朝日新聞出版発行、かみや歴史編集部編著『神社と神々』
10. 日本実業出版社発行、稲田義行著『日本思想』
11. 河出書房新社発行、武藤光著『日本人なら知っておきたい神道』
12. 中公新書、伊藤聡著『神道とは何か』
13. 河出書房新社発行、戸矢学著『神道入門』
14. 丸善出版発行、『世界宗教百科事典』
15. 青土社発行、P. R. ハーツ著（山内春光訳）『神道』
16. せりか書房発行、エリアーデ、クリアーノ著（奥山倫明訳）『エリアーデ 世界宗教事典』

2022年7月5日脱稿

## 今後のスケジュール

### 【癒しの音楽コンサート】

2022年9月3日(土曜日)14時開演

会場：飯島藤十郎社主記念「LLC ホール」

出演：水野佐知香(Vn)、三宅美子(Hp)

吉原佐知子(箏)、崎元譲(ハーモニカ)

### 【クリスマスコンサート 2022】

2022年12月25日(日曜日)14時開演

会場：横浜市磯子区民センター「杉田劇場」



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp <http://just-int.com/>

2022年8月10日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会  
編集：相坂政夫

\*純正律音楽研究会 YouTube チャンネルを開設しました。

コンサートや CD 紹介の映像が当会ホームページからご覧いただけます。

<http://just-int.com/>